

試行錯誤の顛末 — 書評誌編集部から

白石壮一郎・川端浩平（大学院 GP 特任助教）

本誌刊行事業の大学院 GP プログラムのなかでの位置づけについては、すでに巻頭の「終刊にあたって」でプログラム・リーダーの古川が、本稿直前の「教育プログラムとしての書評誌刊行」でサブ・リーダーの阿部が述べている。ここでは、これまでに4号を数えた本誌の「編集部」、あるいは投稿者たる大学院生らの「伴走者」ともいえる位置にあった助教ふたりの視点から見えていた本事業のプロセスの一端を記しておきたい。

1. 書評論文執筆から投稿、審査までの流れ

以下に記す①～⑤の流れにしたがって毎号の企画と編集の作業をすすめてきた。書評誌の刊行が年2回とあって、スケジュールは全体的に——執筆者にとっても査読者にとっても、そして編集部にとっても——タイトなものだったといえる。

① 対象図書の選書と執筆

大学院 GP で実施した院生への研究図書購入助成の対象者には、購入した図書のうちから選んで書評論文を執筆し、本誌に投稿することを義務付けていた（そのほか、助成対象者以外からの自由投稿も受け付けていた）。投稿前には GP 事務室の助教ふたりに原稿を提出し、以下②の「下読み」を経ることになるが、この提出までの実質的な草稿執筆期間は3ヶ月ほど。

② 下読みと改稿（投稿まで）

GP 事務室に提出された草稿を助教ふたりが下読みし、執筆者と議論したうえで改稿をすすめる。この期間は約1ヶ月間。創刊号は人数的な制約（助教ひとりに15人の投稿）から、メールと添付のコメントシートでのやりとりのみだったが、助教ふたりとなった第2号以降、面談とメールによる執筆者たちとのやりとりをおこなった。この下読み段階では、論文の内容に関する議論よりも、論文の全体構成、論理的な整合性など、査読者の通読に耐えうる原稿にまでブラッシュアップすることが主眼に置かれた。1ヶ月の最後に、投稿し査読にまわせる原稿を助教ふたりが協議のうえ決定。

③ 匿名審査員による査読（投稿後）

査読期間は投稿後3週間から1ヶ月。匿名審査員は、編集委員（＝大学院 GP 運営委員）がつとめ、A～Cの三段階評価を付したコメントを作成。なお、本号（第4号）への投稿分のみ、匿名審査員による審査とは別に、「専門領域からのコメント」として、編集委員外の社会学部の教員からコメントをもらっている。

④ 査読コメントを受けてからの改稿

約半月～1ヵ月間。ここでも②の「下読み」同様に、投稿者からの問い合わせや相談に応じて助教ふたりが改稿をサポートした。本号（第4号）では、改稿した原稿に加えてA4で1枚程度にまとめた査読コメントへの応答を投稿者に作成・添付してもらった。この改稿を経て再び原稿は匿名審査員の手にわたり、約半月間の期間を経てA～Cの三段階（再）評価がなされる。ここでA評価を受けた原稿のみが採択され、掲載決定。最終的な原稿修正ののち、入稿にいたる。

⑤ 反省会

ほぼ毎号、刊行後には「反省会」を大学院生、助教、編集委員三者でもち、「書評論文を書くとはどういうことか」、「書評論文対象図書を選定に関する注意点」などを伝えたうえで次号以降の取り組みについて話しあった。本号（第4号）に関しては、研究図書購入助成対象者を集めて、かれらの購入予定図書リストを参照しながら編集委員と助教が直接の選書アドバイスをおこなった。

なお、各号には書評論文とは別に「特集」を組んだ。編集委員が互選した責任編集者が企画し、大学院GPの主旨に沿ったテーマを設け、学内外の院生・若手研究者から寄稿された原稿、あるいは座談会・学会部会などの成果報告を掲載している。

2. 進行中に浮上した問題点と対処

おおむね以上のような流れで各号を刊行していったわけだが、創刊号企画当初はあらゆることに關して手探りですすめていく状態だった。まずもって、書評論文を書くということ自体のハードルは高い。実のところ、われわれ助教ふたりも「書評論文」を執筆した経験がなく、『社会学評論』を引っ張り出してきて形式面などにわか勉強を試みたこともあった。しかし結局は、修士論文、博士論文、そのほかの学術誌投稿論文など学術論文を執筆する大学院生・研究員たちにとって、関連研究をレビューするにともなう必然的におこなうことになる作業と書評論文執筆は密接にリンクするものであり、相乗効果が期待できるものだ。「書評論文とはなにか」に関しては、創刊号（「発刊に寄せて」）で高坂委員が述べ、本号本稿直前（「教育プログラムとしての書評誌刊行」）で阿部委員が述べている内容を編集委員のあいだで共有したうえで、助教ふたりが「前線」で院生たちと議論（「指導」とは呼ばなかった）し、これを通して院生たちが投稿までに何度も改稿を重ねるという「虎の穴」体制が徐々に構築されていった。

しかし以上のような議論をふまえたうえでも、やはり浮上したのは審査員たちの要求レベルと投稿される論文とのレベルとのギャップであった。このため初期の編集委員会は紛糾することもしばしばあったと記憶する。たしかに問題は多かったが、われわれとしては編集委員会での厳しい意見に半ば首肯しつつも、院生の現状を出発点にしたポジティブな教育プログラムとして始動させるべく、編集委員らとともに試行錯誤を繰り返し、これらの問題点をひとつひとつクリアしていくようつとめた。

（1）選書の問題

上述のように、大学院GPの研究図書購入助成の対象者は、購入した図書のなかから対象図書を選ぶことが義務付けられていた。大学院生は購入前に購入予定図書のリストを作成し、助教と編集委員

がチェックを経て研究図書を購入する。10,000字前後に及ぶ書評論文を書くのに明らかに適さないか、相当の困難のともなう概説書、新書、入門書、古典・準古典のたぐいを（さしたる覚悟なく！）書評対象として選んでしまう院生が当初はしばしば見受けられた。この状況を受けて、上述の「反省会」を毎月刊行後におこなったことの効果と、創刊号、第2号と先例が蓄積され、執筆・投稿経験者が増えたこともあって、徐々に選書の基準が大学院生のあいだでも共有されていったものと思う。

選書に関してはもうひとつ問題があった。それは、「大学院 GP の研究図書購入助成で購入した書物から書評論文の対象図書を選ぶ」という制限の存在である。たとえば修士論文で関連研究レビューをした際に、大学院生各自は自分の研究にとっての重要参考文献があるはずなのだが、それらはすでに手元にある——したがってそれらを対象として選ぶことができないのだ。購入前にあるていどテーマや内容を吟味しているとはいえ、初読の研究書と格闘して期間内に書評論文を書きあげるとなると、かなりハードルは高い。むしろ、そうすることによって大学院生をこれまでの研究からのさらなるステップアップへ挑戦させる効果はあるが、書評論文のクオリティをもとめるならばこの制限は本末転倒にもなりかねない。そこで第3号からは、研究図書購入助成で購入した文献を重要参考文献として使用したならば、論文のメインの対象図書は手持ちの既読文献でもよい、とルールを変更した。以降の執筆者が、とくにこの変更によって「それまでの自分の研究の遺産にすぎない」傾向が出てきたようすもなかったため、書評論文のクオリティに対して大幅の妥協をすることなく、ハードルを多少下げることができたのではないかと思う。

（2）構成の問題

大学院生は、書評論文を執筆するのは初めてであるばかりか、修士課程の院生は一定以上の長さの論文を執筆すること自体が初めてである場合がほとんどだ。したがって、助教ふたりに提出された原稿の中には論文の骨格、構成がしっかりしていない草稿も少なくなかった。草稿提出前にも、「できるだけ早い段階に相談すること」ともアナウンスしていたのだが、現実には、授業やゼミそのほか大学院生としての活動に加えて（院生だって忙しいのだ）、対象文献読解に必死である執筆者にはその時間的余裕もほとんどなかったのではないかと思う。

対象文献の内容が把握されていない、あるいは全体構成がしっかり整理されていない草稿に対しては、執筆者と日程・時間を調整して助教との面談をおこなった。面談の際には、執筆者にあらためて全体構成を示すレジメを用意してもらった。こうした面談は1回に限らず、原稿の改稿に着手するまでに数回繰り返した例もある。大学院生には大変だったかもしれないが、「対象とした本の内容を的確に評すると同時に、筆者なりの問題関心や分析視角から、その本自体の意義を論じる」（阿部、本号）という書評論文の条件を各執筆者が満たしていくためには、こうした個別具体的な議論によって伝え、身につけてもらうしかないものと思う。もちろん、これらの議論を通してこちらも鍛えられたし勉強にもなった。

刊行を重ねるにしたがい、前述の「反省会」での話し合いや編集委員の呼びかけもあって、執筆者が助教とのこうした個別面談だけではなく、執筆中の書評論文をゼミなどの場を使って発表・検討したうえで改稿をすすめていくというプロセスも定着していった。これが非常に効果的だったことは、面談のさいにみせてもらった原稿をみても明らかだったのであり、われわれにとって非常にうれしいことだった。

(3) 査読の過程

投稿にいたるまでの問題点とそれに対する対処はほぼ上記2点に集約される。一方、投稿後の審査過程での試行錯誤もいくつかあげられる。投稿された各論文の匿名審査員は、編集委員のなかから選ばれた。審査員の選定に関しては、各論文のテーマと審査員の研究領域とのマッチングが基準となったが、執筆者の制度上の指導教員が編集委員に含まれる場合には、指導教員以外から選定した。執筆者が指導教員に執筆・改稿の相談をしやすいうようにするためである。

査読コメントには、A～Cの三段階評価だけではなく、執筆者への具体的な改稿指示を付すように編集部より依頼した。本号で阿部が述べているように、これは執筆者を挫けさせずに改稿に向かわせる教育的配慮であるが、院生を自立した研究者のタマゴであるとみるならば「親切すぎる」という向きもあるかもしれない、なにより審査員に相当の負担を強いるものでもあった。しかし、大学院 GP プログラムが大学院教育のための事業であることに鑑みれば、こうした取り組みの結果4号で計17本の書評論文の掲載にいたった成果は決して小さくはない。あらためて、審査にあたった編集委員の方々、および第4号の専門領域からのコメントの作成にあたってくださった社会学部教員8名の方々にはお礼を申し上げたい。

3. 反省点と回顧

ここまで経過レポートを読み進めていただいた読者にはあらためて同意していただけるかと思うが、①～⑤の流れを年2回くりかえす発行スケジュールはそれなりにタイトだった。実質2年半という期間限定の大学院 GP プログラムゆえに、院生・教員の方々とともにこのタイトさを走り抜けることができたという面があるが、もう少し余裕をもってひとつひとついねいに対応していくことを考えれば、年1回でいどの発行スケジュールでもじゅうぶんな効果が見込めるだろう。

もちろん大学院生にとって、短期集中の執筆期間はとても重要だ。だが、通常の査読付きジャーナルへの論文投稿のことを考えても、投稿までの文献読解と論文執筆期間は半年間ほどあってもよい。その期間に執筆者は教員や先輩―後輩間大学院生どうしでの議論と改稿作業をすすめることができる。査読期間も、通常のジャーナルよりもかなり短く、多忙な編集委員の方々に2-3週間での査読とコメントを依頼するには多少の勇気が必要だった。

そして、こうした書評誌刊行事業そのものの意義もふくめた、研究科大学院生・研究員へのフィードバック。これは本書評誌刊行事業の長期的目標のひとつだったが、途半ばといったところだ。本事業ふくめ、本大学院 GP のもとのいくつかの「大学院教育改革」の取り組みは、ある程度は教員によって「上から」なされていくことが必要だが、それに終始せずに、それぞれの改革事業を受けて教員と大学院生とのあいだで相互にフィードバックがあって、大学院生の研究への主体的な取り組みがあらたに立ちあがってくることを、これをもって一定の帰結とみるべきだろう。

この意味で、書評誌刊行事業の成果は先にふれた「書評論文17本」にはとどまらない。刊行を重ねるにつれ、執筆者は経験者に執筆や改稿の相談をするなどゼミを越えた大学院生どうしで議論する土壌ができつつあるようだし、一方では先述のとおり、ゼミ発表などの機会を活用して自分の研究テーマと関連させた書評論文の執筆と改稿をすすめるようになってきている。また、投稿される書評論文は当初、大学院 GP からの研究図書購入助成を受けた、いわば「義務付けられた」院生たちの原稿がすべてだったが、少数だが自由投稿による原稿も提出されるようになった。

こうした大学院生による主体的な取り組みのわかりやすい成果のひとつが、本号と同時期に発行される本誌別冊『大学院 GP 共同研究成果論集』だろう。これは、本大学院 GP のもとで院生・研究員が組織したふたつの共同研究班「東アジアのストリートの現在」「〈承認〉の社会学的再構築」の代表者らが編者となって、それぞれの開催した研究会での報告内容を中心に、学内外の院生・若手研究者から寄稿を募って編まれたものだ。助教ふたりは企画・編集会議に同席し、相談に応じてアドバイスはするが、基本的に寄稿者との連絡から目次構成にいたるまですべてかれらの主導で作業がすすめられている。

別冊もふくめ、本誌刊行事業の成否については、むろん読者のみなさんの評価を待つしかない。そして、われわれ助教ふたりがよき「伴走者」でありえたかどうかは、院生諸氏の評価を待つよりほかないのだが、一定の役割を果たしえたものと念じつつ、筆を置こう。